

イネ紋枯病に対する育苗箱施用剤インピルフルキサム剤の防除効果

1 普及に移す技術の内容

(1) 背景・目的

本県の水稲栽培では、病害虫の省力的防除対策として、育苗箱施用剤の播種時覆土前処理法が広く普及している。育苗箱施用剤は、複数の病害虫の同時防除が可能であり、栽培地域における病害虫の発生状況に応じて選択されている。ところが、重要病害の紋枯病を対象とした播種時覆土前処理が可能な防除成分は1成分のみであり、育苗箱施用剤の選択の幅を広げるために、新規成分を含む薬剤の実用化が望まれている。このような状況の中、本処理が可能な新規紋枯病防除剤が開発されたことから、本剤の防除効果について検討した。

(2) 技術の要約

イネ紋枯病に対して、インピルフルキサム剤の育苗箱施用（播種時覆土前、50g/箱）は、ペンフルフェン剤（既存剤）の同処理と比較して同等～やや劣るが、実用的な防除効果を示す。

2 試験成果の概要

- (1) インピルフルキサム剤の育苗箱施用（播種時覆土前、50g/箱）は、ペンフルフェン剤の同処理と比較して同等～やや劣るが、実用的な紋枯病防除効果が認められた（図1）。
- (2) なお、2023年の病勢進展は、穂ばらみ期頃までは緩慢であったが、その後は急激であった。このような状況において、インピルフルキサム剤の育苗箱施用の防除効果は、ペンフルフェン剤の同処理と比較してやや劣った。また、2024年の病勢進展は、発病初期から急激であったが、穂ばらみ期以降はやや緩慢であった。このような状況において、インピルフルキサム剤の育苗箱施用剤の防除効果は、ペンフルフェン剤の同処理と同等であった（図1、図2）。
- (3) 薬害調査を適宜行った結果、いずれの試験においても実用上問題となる薬害は認められなかった。なお、育苗箱における根張りについても問題は認められなかった（データ省略）。

[具体的データ]

【試験概要(図1および図2 共通)】

[2023年]

供試薬剤:インピルフルキサム剤(スタウトアレスモンガレス箱粒剤)、ペンフルフェン剤(ヨーバルパワーEV箱粒剤)

試験場所:鳥取市橋本(鳥取県農業試験場)

品種:‘きぬむすめ’

播種量:乾粳 150g/箱

移植:5月24日(稚苗機械移植、19箱/10a、条間30cm×株間18cm)

出穂期:8月14日

薬剤処理方法:播種時覆土前に育苗箱施用(50g/箱)

発病調査方法:発病株の有無および最上位病斑高を調査

病斑高率の計算式:最上位病斑高(cm) / 草丈(cm) × 100

[2024年]

移植:5月22日(稚苗機械移植、20箱/10a、条間30cm×株間18cm)

出穂期:8月14日

※その他は2023年と同様

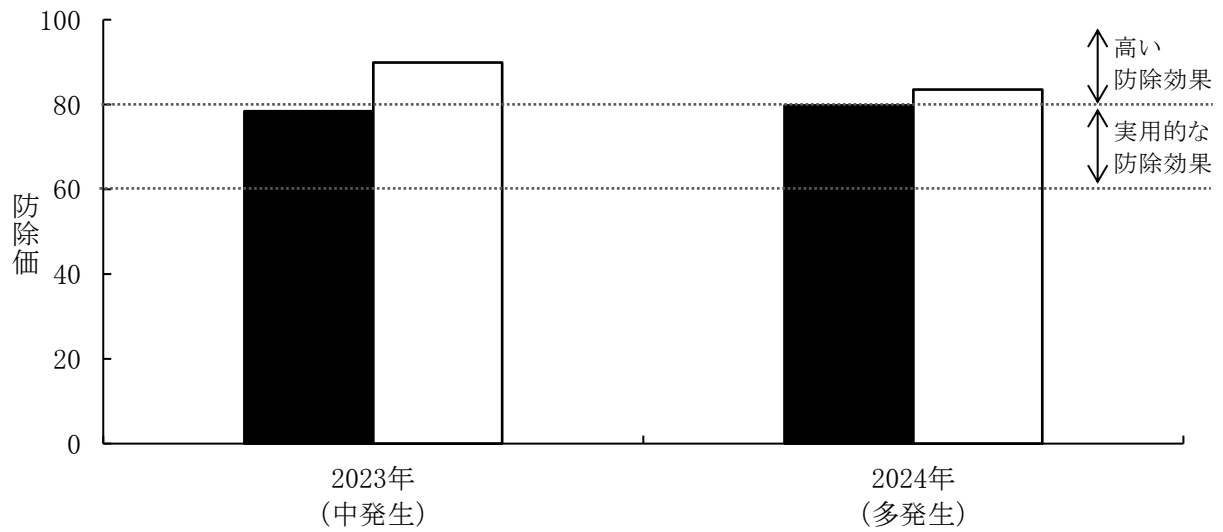


図1 イネ紋枯病に対するインピルフルキサム剤の防除効果

注1) 凡例

■:インピルフルキサム剤、□:ペンフルフェン剤

注2) 調査日

2023年:9月14日(出穂31日後)、2024年:9月12日(出穂29日後)

注3) 無処理における全体の被害度(羽柴法により算出)および発病度

[2023年]

全体の被害度:36.6、発病度:34.8

[2024年]

全体の被害度:53.4、発病度:53.8

※参考(紋枯病の発生程度別基準(発病度))

無:0、少:1~20、中:21~40、多:41~70、甚:71以上

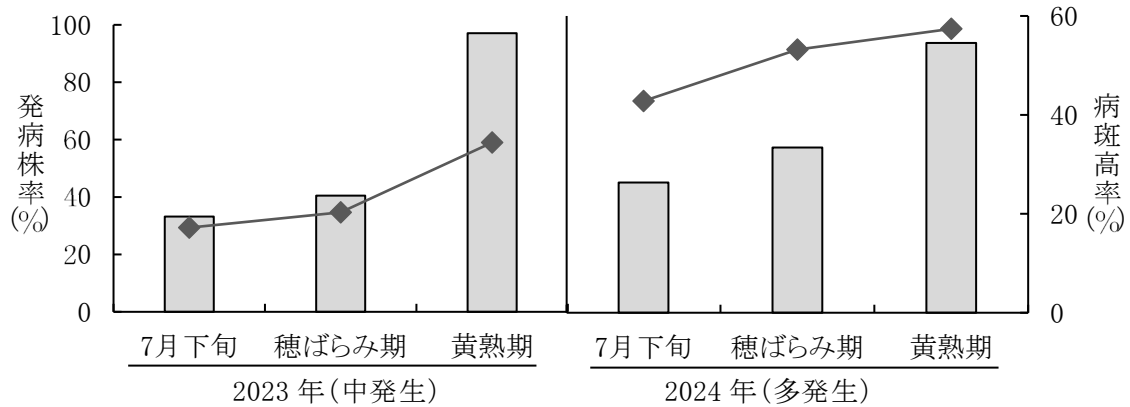


図2 無処理におけるイネ紋枯病の発病株率と病斑高率の推移(参考)

注1) 凡例

折れ線:発病株率、縦棒:病斑高率

注2) 調査日

[2023年]

7月下旬:7月24日(移植61日後)、穂ばらみ期:8月9日(出穂5日前)、黄熟期:9月14日(出穂31日後)

[2024年]

7月下旬:7月24日(移植63日後)、穂ばらみ期:8月13日(出穂1日前)、黄熟期:9月12日(出穂29日後)

3 普及の対象及び注意事項

(1) 普及の対象

鳥取県下全域

(2) 注意事項

1) 2026 年 2 月 6 日現在、インピルフルキサムを含む育苗箱施用剤は、稲大将箱粒剤、スタウトアレスモンガレス箱粒剤、ブーンアレスモンガレス箱粒剤等が農薬登録されている。

2) 要防除水準を超える場合は、本田散布剤による防除を行う必要がある。

‘コシヒカリ’ および ‘星空舞’：出穂 20～15 日前の発病株率 25%以上または穂ばらみ期の発病株率 18%以上で即防除。

その他の品種：幼穂形成期頃の発病株率 20%以上で即防除。

※詳細については、主要作物病虫害防除指針、水稻・大豆・小豆栽培指導指針等を参照。

3) 薬量が不足すると防除効果が低下するため、規定量（50g/箱、高密度に播種する場合は 1kg/10a（50～100g/箱））を均一に散布する。また、極端な疎植は避ける。

4 試験担当者

環境研究室 研究員 宇山啓太^{※1}

室 長 香河良行^{※2}

室 長 奥谷恭代

※1 現 東部農林事務所八頭事務所八頭農業改良普及所 改良普及員

※2 現 西部総合事務所農林局西部農業改良普及所 普及主幹